

# 「ウメ衰弱症」発生園でのせん定方法と収量

衰弱樹の収量は切り返しせん定で増加

## 1. はじめに

「ウメ衰弱症」(以下、衰弱症)の発生要因については現在も研究中であるが、弱いせん定とそれに伴う着果負担が樹勢低下を助長していると考えられている。そこで、衰弱症の被害樹の樹勢回復や健全樹の症状発生防止のためには、切り返し主体の強せん定を行い、成育の旺盛な枝への更新と着果量の調節が必要と思われる。

ここでは、健全樹と衰弱樹(中程度の症状)の「南高」の成木樹を用いて慣行のせん定と切り返しせん定中心の強せん定を2年間行い、収量と果実の階級構成を調査したので紹介する。

## 2. せん定方法と収量の推移

健全樹での収量は、慣行せん定樹が2年連続100kg以上と多かった。強せん定樹では、強せん定初年度の1992年は慣行せん定樹に比べて劣ったが、2年目は101.3kgで慣行せん定樹と差がなかった(図1)。

衰弱樹での収量は、慣行せん定樹では、1992年が35.5kg、1993年が20.0kgと減少した。強せん定樹では、1992年は56.7kgと慣行せん定樹に比べて多く、さらに1993年は慣行せん

定樹が減少したのに対し、63.2kgと若干増加傾向にあった。衰弱樹の樹勢は、強せん定樹ではせん定前に比べて多少回復したが慣行せん定樹では変わらなかった。

以上の結果、着果制限を目的とした強せん定であったが、収量は思ったほども減少せず、衰弱樹では逆に増加する傾向が見られた。これは、強せん定によって、1.強勢な枝への更新による樹勢の維持と2.地上部と地下部のバランスが改善されたことと3.花数の減少によって着果率が良くなったためと考えられた。

## 3. せん定方法と収量及び果実階級構成

健全樹での果実の階級構成は、強せん定樹では3L果が半分を占め、慣行せん定樹に比べて大玉の果実が得られた(表1)。また、衰弱樹では、慣行せん定樹が2L果以上の割合が8割を占め、強せん定樹に比べて大玉となる傾向があった。これらのことから、果実の階級構成は収量との相関が強いと思われた。

## 4. おわりに

「ウメ衰弱症」は、いったん発生すると樹勢の回復は大変難しいため、健全な樹についても樹勢の維持に留意したせん定を行うことが大切である。しかし、産地では収量を重視す

るため、間引き主体の弱い

剪定の樹が多くみられる。

この調査の結果、「南高」のように豊産性の品種では切り返し主体の強せん定を続けることによって、樹勢と収量とのバランスがとれると考えられた。

(育種部 岩本和也)

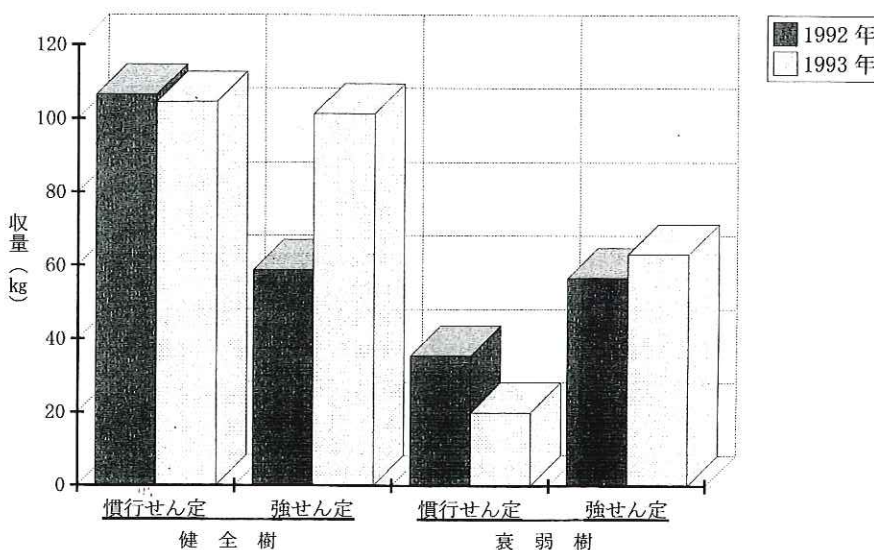


図1 「ウメ衰弱症」発生園におけるせん定方法と果実収量の推移